

# 意図と行為——「人間科学」は可能か——

黒崎 宏

## 1. はじめに

ポール・アーサー・シルプ (Paul Arthur Schilpp) を編集者とする「当代哲学者文庫 (The Library of Living Philosophers)」の最新の一冊として、1989年に『ジョージ・ヘンリック・フォン・ヴリクトの哲学 (The Philosophy of Georg Henrik von Wright)』がオープン・コート (Open Court) から出版された。その中でノーマン・マルカム (Norman Malcolm) が「意図と行動 (Intention and Behavior)」という批判論文を書き、フォン・ヴリクトがそれに答えている。この論文は、全体として、二つの部分に分けられている。前半はフォン・ヴリクトによって論じられたいわゆる「実践的推論 (practical inference)」についての批判であり、後半は、デイヴィッド・アームストロング (David Armstrong) とドナルド・デイヴィッドソン (Donald Davidson) によって展開された「二重結合テーゼ (Double Connection Thesis)」とも言われるべきものについての、ソール・クリップキ (Saul Kripke) を援用しての批判である。私にとっては、そのいずれもが非常に興味深いものであり、私はそれらから非常に大きな示唆を得た。それは、一口で言えば、「人間科学は不可能である」という事である。以下において私は、そのマルカムの論文から得た示唆の一部を、この観点から展開してみようと思う。

## 2. 実践的推論

「実践的推論」とは、ひとまずは、次のような形式の推論の事である。

1. ある人Xは、或る特定の時刻  $t$  において、或る事態Sを成し遂げようと意図していた。
2. Xは、或る時刻  $t'$  において或る事Aをしない限り、時刻  $t$  において事態Sを成し遂げることは出来ないと信じていた（知っていた、了解していた）。そしてXは、時刻  $t'$  が到来した事を知った。それ故、Xは時刻  $t'$  においてAをした。

ここで大切なことは、第1の前提是「意図」についての前提であり、第2の前提是「信念（知識、了解）」についての前提である、という事である。したがって「実践的推論」とは、簡単に言えば、意図と信念から行為への推論なのである。なお、今は時制を過去形にして書いたが、現在形で書いても同じ事である。その間には本質的な違いは存在しない<sup>1)</sup>。また後に、更に三つ目の前提が付け加えられる。

まず、具体例を挙げておこう。これはマルカム自身が挙げているものである。

「R」と呼ばれる囚人がいたとしよう。彼は、看守に監督されながら、原動機付きの大型ボートでカユガ湖を渡って、移送されていた。ボートがポールトン・ポイントを通過した丁度その時、Rはボートの縁を越えて水に落ちた。そして、次のような「実践的推論」が提供された。

1. Rは、ボートが向こう岸に着く前に、逃げようと意図していた。
2. Rは、ポールトン・ポイントでボートの縁を越えて水に落ちない限り、逃げることは出来ないと信じていた。そして彼は、ボートがポールトン・ポイントに来たことを知った。

それ故、Rはボートの縁を越えて水に落ちた。

さて、この実践的推論は「論理的に決定的」であろうか。それら二つの前提からこの結論が論理的に帰結する（entail）であろうか。明らかに、そうではない。たとえ彼は現実には確かに「落ちた」とはいえ、我々は、それらの前提是真であるが、しかし、この結論は偽であるような、その様な状況は幾らでも考えることが可能である。例えばRは、彼の分け前について考えこんでいて、ボートがポールトン・ポイントに来たとき、逃げようという彼の意図をちょっとの間忘れていたのかもしれない、或

はRは、一時的な目眩のために、立ち上がる事が肉体的に不可能であったのかもしれない、或はRは、鎖で繋がれていたり、柵が高くて、ボートの縁を越える事が物理的に不可能であったのかもしれない、等々である。

そこで、これらの事がなかったという事を、第3の前提として付け加えることにしよう。すると、先の実践的推論は次のようになる。

1. Rは、ボートが向こう岸に着く前に、逃げようと意図していた。
2. Rは、ボールトン・ポイントでボートの縁を越えて水に落ちない限り、逃げることは出来ないと信じていた。そして彼は、ボートがボールトン・ポイントに来たことを知った。
3. Rは、ボートの縁を越えて水に落ちることが可能であった。即ち彼は、ボートがボールトン・ポイントに来たとき、逃げようという彼の意図を忘れてはいなかった、或は彼は、立ち上がる事が肉体的に可能であった、或は彼は、ボートの縁を越える事が物理的に可能であった。

それ故、Rはボートの縁を越えて水に落ちた。

勿論、Rがボートの縁を越えて水に落ちることが可能であるためには、それ以外の条件——例えば、彼は水泳の達人であった、など——も付加することが必要であろう。それ故、その様な条件が問題になれば、必要に応じてそれらも第3の前提に付け加えることにする。

さて、この様にして前提を必要に応じて充実させてゆけば、この実践的推論はいつかは「論理的に決定的」になるであろうか。やはり、そうではない。確かに、もし我々がこれら三つの前提を認めれば、それでもなおRがボートの縁を越えて水に落ちなかつたという事は、理解できない。しかし、だからといって、これら三つの前提からその結論が論理的に帰結するわけではない。我々は、これら三つの前提は真であるが、しかし、この結論は偽であるような、その様な状況は、依然として考えることが可能なのである。

この様に言うと、Rがボートの縁を越えて水に落ちることが可能であったにもかわらず、実際には水に落ちなかつたのは、Rには或る無意識の抑圧があったからである、と言って、深層心理を持ち出して来る人が

いるかもしれない。そして、「Rには、ボートの縁を越えて水に落ちることを防げるような、無意識の抑圧はなかった。」という深層心理における事実を、第4番目の前提として先の三つの前提に付加すれば、それらの前提からは、先の結論は論理的に帰結する、というのである。

しかし、果してそうであろうか。ここで言われているところの、「Rには、ボートの縁を越えて水に落ちることを防げるような、無意識の抑圧はなかった。」という深層心理における事実なるものは、一体何によって知られるのであろうか。それは、定義によって、Rには意識されないものである。しかばそれは、Rの行動を観察している他人によって知られるのであろうか。確かに、Rの行動を熟知している人には、Rにその様な深層心理を仮説として立てることは可能であろう。しかしその仮説は、Rが行なう実際の行為によってのみ確かめられるのであり、したがって、そのような深層心理を前提として付加すれば先の結論は論理的に帰結する、と言うことは、論理的には循環しているのである。

そうであるとすれば、今の場面で上記のような「深層心理」を持ち出すことは、何の役にも立たないのである。なおここで代わりに、「Rには、如何なる無意識の抑圧もなかった。」という事を第4の前提として付加しても、事態は少しも改善されない。何故なら、この一般命題が今の場合にも当てはまるかどうかという事は、論理的には不明であり、それはやはり、まさにRが行なう実際の行為によってのみ確かめられるのであるから。したがって、そのような深層心理を前提として付加すれば先の結論は論理的に帰結する、と言うことは、やはり論理的には循環しているのである。

これらの教訓は何であろうか。それは、実践的推論においては、前提を如何に充実させようとも、推論は「論理的に決定的」にはならない、という事である。推論は演繹論理学における推論（entailment）にはならない、という事である。言い換えれば、実践的推論においては、前提と結論の間には必然性はないのである。

### 3. 論理的推論

実践的推論との関係において、演繹論理学における推論——「論理的推論」を見てみよう。

ここでマイケル・オークショット (Michael Oakeshott) とルイス・キャロル (Lewis Carroll) が思い出される。ピーター・温inch (Peter Winch) は彼の著『社会科学の理念と哲学への関係 (The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy)』 (Routledge & Kegan Paul, 1958; 森川真規雄訳『社会科学の理念——ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究——』新曜社, 1977)において、この両者に言及し、次のように言っているのである。

……オークショットは、——ふたたび全く正当にも——人間の活動様式は決して一組の明示的な格律 (precept) に要約されることはないと述べている。活動は格律を「はるかに越える」のである。たとえば、格律とは実践において適用されねばならないものである。そしてたしかに我々は、この一組の格律がどのように適用されるべきかを規定する、より高次なもう一組の格律を示し得るとはいえ、我々は、ルイス・キャロルがその論文「亀がアキレスに言ったこと ('What the Tortoise Said to Achilles')」——これは論理学者の間でしかるべき名高いものである——で示しているところの、ツルツルの斜面に立つことなくしては、この道に沿ってさらに進むことはできないのである<sup>2)</sup>。

アキレスと亀は、A, B, Z, という三つの命題を論じているところである。これらの命題は、ZがAとBから論理的に帰結する関係にある。亀はアキレスに、自分 [亀] を、AとBは真として受け入れるが、仮言命題 (C) 「もしAとBが真なら、Zは真でなければならない。」の真なることは未だ受け入れないものとして扱い、自分に、Zを真として受け入れることを論理的に強いるよう求める。アキレスは亀にCを受け入れるよう頼むことからはじめ、亀はそうする。それからアキレスは彼のノートに次のように書く。

「A  
B  
C (もしAとBが真なら、Zは真でなければならない。)  
Z」

次に彼は亀に言う。「もし君がAとBとCを受け入れるなら、君は

Zを受け入れなければならない。」亀は何故そうしなければならないかとたずねると、アキレスは答える。「なぜならそれ [Z] は、それら [A・B・C] から論理的に帰結するからだ。(D)「もし A と B と C が真なら、Z は真でなければならない。」君はこれに異議はないと思うが。」亀は、アキレスがそれをノートに書き込むなら、Dを受け入れてもよいと言う。それから次の対話が続く。アキレスは言う。

「君は A と B と C と D を受け入れたからには、もちろん Z を受け入れるだろう。」

「私が？」亀は無邪気に言った。「そいつをもっとはっきりさせよう。私は A と B と C と D を受け入れる。しかしながら私は Z を受け入れないとすればどうだろう。」

「そうすれば論理は君の首根っこを押え、それを否応なく受け入れさせるだろう！」アキレスは勝ち誇ったように答えた。「論理は君にこう言う。『おまえは好き勝手にするわけにはいかない。A と B と C と D を受け入れたからには、おまえは Z を受け入れなければならない』と。だから君には選択の余地はないんだ。わかるだろう。」

亀は言う。「論理が私に教えるものは何でも書き留めるに価する。だからそれを君にノートに書き込んでもらいたい。我々はそれを「もし A と B と C と D が真なら、Z は真でなければならない。」と書いて (E) と呼ぼう。私がそれを認めない限り、もちろん、私は Z を認める必要はない。だからそれは全く必要な手順だろう？」

「わかった。」とアキレスは言った。彼の口調には悲しげな響きがあった。

この話は何ヵ月か後、語り手がこの場に戻り、二人がまだそこに座っているのを見つけるところで終わる。ノートはほとんど真っ黒だった。

この話の教訓は、——それを今さら指摘することで読者をうんざりさせてよいなら——実際の推論の過程（それが結局は論理の核心な

のだが）とは、論理的公式として示し得ないものだということであり、……。推論を学ぶとは、単に命題間の明示的な論理的関係を教わることではない。それは何かを行なうことを学ぶことなのである。ところで、オークショットが主張しているのはまさにこの事的一般化である。キャロルが論理的推論について述べていることを、オークショットは人間の活動一般について主張しているのである。  
(原本pp.55-57、訳68-71頁)

実は、「論理的に決定的」である論理的推論においてさえ、アキレスのノートが示すように、前提をノートが真っ黒になるまで増やしても、前提と結論との間の溝は埋まらないのである。前提と結論の間を明示的に繋ぐことは出来ないのである。そして、オークショットが示唆したように、同じ事がより大規模に実践的推論においても言えるであろう事は、当然である。「豈、実践的推論においておや。」というわけなのである。

しかば、何故この様なことが起こるのであろうか。それは、ウインチも言っているように、「推論」とは一種の「行為」であるからである。そして、ウィトゲンシュタインも言っているように、規則（格律）は行為の仕方を決定できないからである。行為は「まさに」行なわれるのであって、如何なる論理といえども、行為者の首根っこを押さえて或る行為を否応なく行なわせることは、出来ないのである。

#### 4. 論理的推論と実践的推論の違い

しかば、前提と結論の間を明示的に繋ぐことは出来ないにもかかわらず、論理的推論は何故「論理的に決定的」であるのか。そして、この点に関しては、いわば程度の差であるに過ぎないと思われる実践的推論の方は、何故「論理的に決定的」ではないのか。

論理的推論において、前提を肯定した人がその結論を否定するすれば、我々は、その人は論理的推論というものを理解していない、と言うであろう。我々は、論理的推論というものを理解している限り、前提を肯定すれば、結論も肯定しなければならないのである。この意味で、論理的推論には必然性があるのである。そしてこれが、論理的推論は「論理的に決定的」である、と言われる所以である。

一方、実践的推論においては、前提が成り立つ人がもしその結論に反する行為をしたとしても、我々は、その人は実践的推論というものを理解していない、とは言わないであろう。我々は、実践的推論というものを完全に理解していて、なおかつ前提を肯定しながら、その結論に反する行為をすることは、可能なのである。この意味で、実践的推論には必然性がないのである。そしてこれが、実践的推論は「論理的に決定的」ではない、と言われる所以なのである。

勿論そうは言っても、実践的推論の結論に反する行為をすれば、それは理解できない行為である、と言われよう。「彼が何故その様な行為をしたのかは理解できない。」と言われるのである。しかし、考えてみれば、人間の行為は何でもかんでも理解できる、と考える方が、実はおかしいのではないか。他人には勿論、自分自身にすら理解できない行為というものは、有り得るのではないか。「魔がさした。」としか言い様のない行為がそれである。そして、この言い方が「循環」していることは、明らかであろう。

さてそうであるとすれば、実践的推論というものには、必然性はないが、合理性はあるのである。それに反する行為は理解されないのである。それに反する行為をした当人が、当の実践的推論を合理性のあるものとして認めるのであり、だからこそ、自分のした行為を、自分にすら理解できないものとして認めるのである。

我々はここに実践的推論の「二重構造」を見ることが出来る。実践的推論は、言語のレヴェルでは、合理性のあるものである。しかし、現実に行なわれる行為は、別である。それは、実践的推論の合理性のある結論に、合うこともあるれば、合わないこともある。そして、合えば、理解され、合わなければ、理解されない。

実践的推論のこの二重構造が、実践的推論を論理的推論から分かつ最大の要素である。論理的推論は、全て言語のレヴェルで行なわれるのであり、そこから出るという事はないのである。

## 5. 結語——「人間科学」は可能か——

人間の行為というものは、実践的推論の結論に、合うこともあるれば、合わないこともある。そして、合えば理解され、合わなければ理解され

ない。「理解される」という事は「説明される」という事である。したがって、人間の行為というものは、もし説明が可能であるとすれば、実践的推論によって説明されることになる。

しかし、実践的推論には、法則は含まれていない。そこに含まれているのは、概念のみなのである。したがって、実践的推論による説明とは、「科学的説明」ではない。それは、いわば「概念的説明」なのである。

それ故、人間の行為というものには、科学的説明はあり得ないのである。

この様に言うと、人間の行為であろうとも、脳に着目すれば、科学的説明が可能である、と言われるかもしれない。しかし、脳を問題にするという事は、身体を問題にするという事である。そして確かに、脳を用いれば身体の運動を科学的に説明することは出来よう。しかし、身体の運動は人間の行為ではない。行為には、依然として、科学的説明はあり得ないのである。

いや、脳を問題にするという事は、心——具体的には、「意図、信念……」——を問題にすることでもあり得る、と言って、いわゆる「心脳同一説」(Mind-Brain Identity Theory)を持ち出して来る人がいるかもしれない。しかしこれはありえない。実はこれが、冒頭で述べたマルカムの論文の後半の主題なのである。それについては、今ここでは述べない。私には、心脳同一説は、余りにも明らかに成り立たないと思われるからである<sup>3)</sup>。ここでは心脳同一説は成り立たない——無意味である——という事を前提しておく。

「人間科学」という事で何を理解するかという事には、様々な問題があろう。しかし以上のようにあるとすれば、とにかく、人間の「行為」という人間にとて最も重大な面に関しては、科学的説明はあり得ないのであり、その意味でだけでも、「人間科学」というものは、ほとんど意味のある概念ではあり得ないであろう。

### 注

- (1) フォン・ヴリクトは、その間には本質的な違いが存在する、と言い、マルカムは、存在しない、と言う。私はマルカムに同意する。これは非常に大切な点である。
- (2) 格律には、その格律の適用を確定する一段高次の格律が必要である。

もしそれを明示すれば、今度は、その一段高次の格律の適用を規定する更に一段高次の格律が必要になり……という様にして、たちまち、次々と一層高次の格律を明示せざるを得なくなる——滑って行く——、という事である。

- (3) 例えは、私の「「科学的人間観」と「パラメカニズム」——「心」あるいは「たましい」の問題——」、『科学の誘惑に抗して——ウィトゲンシュタイン的アプローチ——』(勁草書房、1987) を参照。